

■第五章 要素 (elements) の考察

この章は、事物の性質 characteristic(s) について論じている。つまり西洋哲学で展開されてきた「本質」の論議である。そしてその例として選ばれているのが、空間 (空) space であるが、この空間という概念は、世界を構成している要素として仏教で伝統的に言われている四／五元素 (〔四大／五大〕、もしくは意識を加えた六区分) のうちの一つであり、残りは地・水・火・風である。この場合の風 air は空気と説明されるが、空間 (間) space の方はいわゆる何もない「空間」そのもののことであり、いわば容れ物である。空気の方はその内容物と考えればわかりやすい。また、ここでいう空 (間) は空性 emptiness とも別であり、あくまでも三次元を構成するベースとしての空間のことである。ついでながらこの仏教の基本的カテゴリーも、前章の五つの集合体同様、哲学的に必然的な分類であるとは考えない方が良くかもしれない。地・水・火・風という区分は、密教などの霊的な実践においては、その象徴的な名に相応するより普遍的な「態」やエネルギー区分などが存在するように言われるのだが、少なくともここでの哲学的論議としてはそのカテゴリーの意味を検証することは保留にしておく。

さて、初期の仏教教派には、上記のような世界の構成要素――地・水・火・風・空――がそれぞれ、事物から独立した固有の性質だと考える一派があった。実際に手に取れる土や水ではなく、そのものの要素としての性質 (本質) というものは、永遠不変の実体的存在だということである。ナーガールジュナはそうした本質実体論者に対して、またここでも反論を繰り広げている。そして最初の二つの詩は、その実体論者の立場からその言い分を述べている部分である。

1. 空間の性質 characteristic(s) 1 に先立っては
ほんのわずかな空間も存在しない
もしそれ (空間) が性質に先立って生じるなら
不合理なことに、性質を持たずに生じるということになる

1. 「性質」 characteristic (Tib. mtsan nyid) の訳語について、ガーフィールドは独自の表記法を主張している：

「性質」とは、他から区別され得る性質、もしくは事物の特徴を表した符合 mark、もし

くはサイン signature、という意味である。したがって私としては、ここでは単数形を用いる。（このとらえ方は、Gareth Sparham 師の教えに負っている。）しかしナーガールジュナが述べている点は完全に普遍的なものなので、複数形の性質 (characteristics) を用いても構わない。Inada (1970)版と Kalupahana (1986) 版ではそうなっている。

Garfield 1995. p.149

1. 意識

（本質実在論者＝実体論者たちはこう言うであろう。）空間というものが存在している以上、それが何の性質（本質）も持っていないということはある得ない。空間が空間としての性質を持つ前には、ほんのわずかな空間ですら存在し得ないのである。もし空間というものが、その性質を持たずに、その性質に先立ってすでに存在していると言うのならば、「性質を持たずに生じる」という不合理な事態が起こり得ることになる。（したがって空間というものは実体でないが、その性質は独立した実体として最初から存在しているのである、と。）

空間という原理を、具体的に存在する事物と同じように「存在している」とか「存在していない」とかいった具合に扱うのは初めから問題がある 2 ののだが、ここで展開されている「具体的な個物として存在している空間はその場かぎりで変化するにせよ、空間としての性質（本質）は本質の世界に存在しており、永遠に変化しない」というとらえ方は、プラトンのアイデアを思わせる。アイデアは永遠不変の範形であり、「家のアイデア」と言う場合、「家」は個々の具体的存在で火事にもなれば崩壊もするが、家の本質である家の「アイデア」は、アイデア界にあって常に変化しないものである。またこれとは反対に、性質というものを「事物の内部に含まれている」と考えると、アリストテレスの形相（けいそう／エイドス）と質料（しつりょう／ヒュレー）の関係に似てくる。エイドスはプラトンの言

2. たとえばすでにカントによって、時間と空間は人間の認識原理の中にあらかじめ備わっているものとして言及されており、事物と同じレベルではない。この詩の性質という表現を「本質＝実体」としてではなく、「あらかじめ備わっているもの（ア・プリオリ）」という意味で理解するならカントと同じになるのだが。

うアイデアであり、3 事物の本質のことであるが、ヒュレーは事物を構成する材料――個々の物質（個物）――である。アリストテレスによると個々の事物は疑いなく実在しており、本質の方は事物に含まれる性質として副次的に存在することになる。こうした考えは神を本質ととらえる後世のキリスト教徒にとって不遜なものであり、一時禁じられたことがあった。そしてアイデアという考えは、本質が実在しているという観点で近代以降批判され、アリストテレスのとらえ方は、禁が解かれた後も、今度は個物が認識に先立って実在していることを疑わないという点で批判されるようになる。

以下はやや煩雑だが、ナーガールジュナのこの詩の解釈を中観派の一般的な解釈から離れて見てみた場合、実体論者の考えを言っているのではないととらえる可能性も出てくるかもしれないので、それについて記しておく。なにしろ1. の詩の本文には、実体論者はこう言っている、などとはどこにも書いてないからである。この場合の詩の意味は、空間というものは単に性質なのであって、その性質を担う「もの」が存在するわけではないとナーガールジュナが主張しているように解せる。その際さらに、空間という原理は事物とは違って特殊なものであるのでそうなるかと考える場合と、特に空間だけを特別扱いしなくても、事物が存在するのは、我々がその性質にしたがった名前でそれを呼ぶことによって――つまり認識することによって存在するということであり、名前の認識より前に事物の実在は証明できない（名目論）のだということを言っている場合が考えられるだろう。しかしどちらもちよっと深読み過ぎるように思う。なぜならまず前者なら、空間だけでなく、地・水・火・風についてもまた同じことであると後の詩で言っている部分が矛盾してくる。地、つまり土ならば、空間という曖昧なものではなく、物質として具体的に存在する（少なくともそう認識できる）わけである。また後者なら、西洋での普遍論争⁴と同じく、ここでの「空間／性質」を「個物／名称」ととらえるよりは、「個物／本質」ととらえた方が論法として自然であろう。

3. プラトンはエイダスという言葉で、概念のアイデアとしてとらえていたので、アリストテレスの用法とは違っている。同じ永遠不変の本質でも、個物の場合はアイデア、概念の場合はエイダス、なのである。そうすると、ここで論議されている「空間」は具体的個物とは言えない存在なので、プラトンの言い方では「エイダス」に入るであろうか。

4. 普遍論争については第二十四章の注 12. に簡単な説明を設けた。

2. 性質を持たない事物は

一つとして存在してこなかった

もしどんな事物も性質を欠いているということがないなら

性質というものはどこから現れてくるのか

2. 意識

(また実体論者は続けてこう言うであろう。) そのものの性質を持っていないような事物は一つも存在してこなかったのである。そしてもしこのことが正しいなら、性質というものはどこから生じ得ると言えるだろうか。(生じたりはしないのである。事物との関係において生じているように見えていながら実際はそうではない。事物の方はともかくとして、性質〔本質〕というものは最初から、実体として存在しているのである、と。)

3. 性格づけられていない uncharacterized ことによっても、性格づけられている characterized ことによっても

性質 characteristic が生じるなどということはない

ましてやそれ(性質)が

それら二つとは異なった何かによって生ずることもない

3. 意識

(しかしそうした実体論者に対してはこう反論できる。もし「性質」というものが実体として事物より先に存在しているならば、その上でなおかつ「事物」との関係で説明される必要はないのではないか。もし具体的事物との関係で性質というものが説明される必要があるという場合は、その「性質」は、「すでに性格づけられている事物」か、あるいは「性格づけられていない事物」かによって具体的に例証される必要がある存在だということになるだろう。しかし) 性質を持っていない事物などは存在しないのだ(と彼ら自身も言うわけである)し、反対にすでに性質を持っている事物によって具体的に例証される必要があるとなると、なぜもう一度、その「事物」によって、先に存在しているはずの実体的「性質」が例証される必要があるのであろうか。もちろん、すでに性質を持っている事物や、持ってない事物を除いた、第三の何らかの事物によって「性質」が説明されねばならないということも考えられない。(したがって「個々の事物と性質とが別々に存在し

ており、なおかつ両方が一緒になることで個々の事物が成立する」などと考えるのは矛盾した二重論法なのである。)

4. もし性質が現れないならば

性格づけられた事物 characterized object というものを主張することは
妥当ではない

もし性格づけられた事物が主張されないならば

性質もまた存在しないだろう

4. 意識

もしそのものの性質が現れていないならば、性質を持った事物などということは主張できない。また反対に、何らかの性質を持った事物というものが存在しなければ、その性質というものも存在しないであろう。(性質と、その性質を持った事物とは、お互いに依存し合って成立しているのである。)

5. このことから、性格づけられたもの characterized も、実在する性質 existing characteristic も

あり得ないことになる

ましてやどんな実在 entity が

性格づけられたものと性質以外に存在し得るだろうか

5. 意識

このことから、何らかの性質を持って実体的に存在する事物も、実体的に存在する性質も、成立しないことがわかる。ましてや、性質を持った実体的「事物」と、実体的「性質」以外の第三の実体などというものが存在すると考えることもできない。

6. もし実在する事物 existing thing が何もないなら

どんな非存在 nonexistence が存在できるというのか

実在の事物と非存在の事物 existent and nonexistent thing を除いたら

実在性と非存在性 existence and nonexistence とを誰が知り得るのか

6. 意識

実体として存在する事物が何もないなら（、すべての存在が実際は「まったく存在しない」ものだ、つまり非存在が存在している、と実体論者は言うことだろうが、實在にしても非存在にしても、それが「存在している」と言うことは、存在という性質を言っているのであり、性質というものは前述のように依存的なのである。その上で）、どんな非存在の事物が実体として存在できるというのだろうか。また、実体的実在物も非存在物も存在しないときに、誰がその実体性や非存在性という性質について主張できるだろうか。（性質とは、事物に依存して説明されるのではないのか。）

本質的に存在するという存在の性質自体が成立しないなら、反対の、本質的に存在しないという性質も同様に成立しないということである。本質的存在（實在）／非存在というのは、どちらも存在のあり方の「性質」であり、その相対的な両極である。つまり實在と非存在とを非相対的に（実体的に）とらえることはできないのである。したがって、「実体的な事物が存在するということと言えない」と主張することは、「何も存在しないということも言えない」とも主張していることになる。ナーガールジュナは虚無論でもないのである。

7. したがって、空間は實在 entity ではない

非存在 nonentity でもない

性格づけられておらず、性質を持たないものでもない

同じことが他の五つの要素についても言える

7. 意識

したがって、空間は実体ではなく、その裏返しであるまったく存在しないもの（非存在）でもないのである。実体的な固有の性質を持ったものだとは言えず、何の性質も持たないものだとも言えない。これと同じことは、空間（空）だけでなく、他の五つの要素—地・水・火・風・意識—についても主張できる。

8. 事物の Of objects

実在 existence と非存在 nonexistence とを認める perceive

愚か者と実体論者 reificationists は

対象として客観化する objectification ことによる平安の実現 pacification
を理解することはない

8. 意識

事物を実体化したり虚無的にとらえたりする愚かな実体論者は（、とらえた対象物や自己自身、また自分のなし遂げたことなどのすべての事象を、永遠に確立されたものだと理解するので、事物／事象への執着を起こしてしまう。したがって、変化し、欲望を向けるに値しないものだと見抜いて）、事物を対象として客観化することで実現できる心の平和という可能性を理解できないのである。

この最後の詩は、論理による論証としてではなく、仏教における救済という形而上学的な観点から述べられている。人間は自己の永続を望むように仕向けられた存在でありながら、永続というものは決してあり得ないという意味で引き裂かれている。哲学的論証によってはそのことが明らかになるが、もちろんそうした自己の非永続性というものを論理的に認識しただけで、永続性への執着を解消することはできない。仏教においては、瞑想などの修練を通して真実のあり方を体得したときのみ欲望／執着は解消できるとしている。したがってこの最後の詩に至るまでに論証されてきた哲学的見解のみによっては救済は得られないのであるが、もし実体性というものを想定してしまうならば、そうした救済の可能性を理解してそこへ向けて努力することすらできなくなってしまうのである。